拾遺久保物語

二ノ上

特別
へ12
5095
3

松逢玖能物語二之上

あこ侍いつのて此侍文をまらんと、捻持て思ひありくらん、
けらよ記やの戸あの武らびしと思ふおかれとたちは
まとハ、たゞ偷ともんとうげのうを志うふ気ありの
法同をもえるずと思ふ守いと情まてまていのでられぬ
きみ出てのちに、みちのうてハまどうにぞこのハ姉まめ見
せんと思ふ、殆恙うこころかくまんおいしらふ
紗のうらひせしお騎云、かう堅のおねみ文をて来つる
すハ、かくさものうれ哀、あいだましう杼をしうたされて、
話とだといううに思はらん、なとごの法世まるらんと、うちか

うちひて、ゑびて法、りみちてゆくゆく、いうでをらんと
おもふ、ゆく、おもひ笛の袋ぬきにぬきて、面ゆかん人のまゑ
まに、とみうるもゆれぬるかどう、もてわづらひて、ゆくゆく
郎やおやりをまをかてゆかれて、見たがるまめひゑゆく
といへば、ちくちなんあしたとて、かくれがくまめひゑゆく
つまでゆかれ下郎やよ笛をうんかやうみるとゆけんとて、
ひきを屋をまりつゑうりうゆあれといへば、ゆくとにさも
てんかをうびしてあれよもひらをでゑしけをでおよ
ゆがりてぬふゆのうぶ郎やのこの戸ゆくりとえて、れいの三
郎ゑうびていとうあしゑまひしゆばなんうれゆよ

うゑれ兄弟ばうんえうをまりくゆゑ、郎くをまくれえを
をゆかるうとうへばうかうりとて面つゆて、かうゆうをわて、
笛をりてえうどおびわて、きめみ下にさし入つ、いうでえん
とれもゆう、袋めひをてい、えをうもていうるゆうう、
かうゆうでえて、あうれと思ふゆかぶわなし、祝笛も
うりければ針のうをれしてかくをうう、
人をば、男ふいもいのでさはゑゆうとゆ清めぐうれ
うおもひてゆうう
とてもうゆ、ゆれうをいうし、
て、をつる袋はゆくゆくめひゆ、やり戸ゆくりとて、おうば
ちいうもむとて、引をて、縁をんとうをばゆうのゆあれ

ゝうゝ仕りし第とりてと、あと仕げう告げぐらんとうへば、用
ゐて、ひの将は第にんとあえうとのつまへば、安ゆしと
ひもて来て、はゝくるまに、来へきてれば、あひまかくして之
めのうちうじて、出第はゝくろめそせまりゆゝとてあけ、
ゆくるゆになんとのふゞ将いとゞあいゝと思へるゝか
ゞりなしいるめれば、てん第の思いてうと山ゞこう
きありまて、ひゝとゞが居ゝるゆりりていゝんづまる
げゝ咲て、あらゆはそはゆ和を思ひゝゆけんぎらん
なゞらくゞゞひと仕いゝとむゝつけくれもて、なゞかさあ
るづゝとらへゞ、典おちゝるゞのゝ矣をおのゝうゆへきば、

あのはゝのゝみゝうそひうまゞゆゝとはゞん、あおとゝゝはゞん
てゝゝゝ思ゝふう、涙もてゝみあゝゞいづゝゞはき面
ゝもいてまゝで男ぎゝみおそきゞて、れゞなりつゝう、
ゆゝはゝしのはゝるやいゝてもおゝゞのゆゝしゆゝ矣ゝ
う、ゆの方はゝ矣ゝのといへゞば、典ゝゞゝの矣もめゝゞみゝま
ふ、ひがゆゆうゝいゆゝゝてゝ、いふゝゝうゝゝと思へゝう、あゝと
きゞゝうゝづのゝゝうもいゝうゝゆにをんいゝゆゞかゝゝゞう
つゞはゝうんと思ゝう、彩ゞゝうもなゝゝてはていゝうゝとゝへ
ゞば、典ゝゝゝひゝゞかゝゝとゝいふゞけ、安のはゝゝゝはゝもゝをゆ
ううけゞゞひあうんゝうへばゝゝもゝうゝせ矣ゝうゝなんばあゆ

うし、疑なんといふてきめ、あとゆゑびしまするかぎり
なし、小林方、祖母法ごい気するほどに、ほひまりてうち
ゆく、たろといふぞかうくのそり侍り、さる用意させは
きて、法名をとなんすつ給いみじくこころあれはくのぐ
せさる者なけんとも、云やうでさぬ、せきぞみやうなまた
つぶれては、さりせんかうなくば、はまぐ思ひつる事、
難事もあらまでおはぬてゆびしまに、またつく法べきうる
はなし、いつのでなじいま者なんと思ひ入るに、物痛みれば、抜く
てうつぬしくて、泣すいみじ出るども有してけれは、おと
やがハ夕餉ども、ひきまゐりて、部屋にひめ、小林方ハ彼てんや

のそりけり、起きして、強や妻戸引明て見ならすらうらふで
うつぶして、いみじく泣叫といふしや、などかくハのたまふぞ
とはへ、君婦みのく侍れど、息の下に云給ひては、袖
の様うとも、曲薬のめし医法なり、かいさぐらせてまくと
いふに、ふぐひなくはくし、何の、風まうり侍らめ、さはし
入るぞまたらく給し侍るまじといへ共はりとも猶ハいとおそろ
しきものをとらふほどに、てんやくまかされば、ちちいさまを
よろびなくば、ふしとりつるきて、に猶縦すかあり、袖の
様うとも、かいさぐり、薬などもまゐらせたまへとて、即
ちづけてしるちめれば、さにしまゐ、法やまひもふとやめ

きりこよりひろハ一尚ろくゆみとりて、猶このいさごり
てゆきすれバ女ねんごろ〳〵うけまぶへどいひ制すれど
人もなしいろ〳〵かわてせめてこびしたまして、ぶりひて
なる〳〵いとゝもゝたるなるみどりの方はろう地
南んなばちめとらるものハ典ハやなどてか田にらんいまハ
世代ふりろう義めとて抱へて居をふわおうこハてんや〳〵
きりと思ひこみてれいのやうに、鎖ちとまきしうめで庭
まけり、ひろ〳〵てん業大めらんとまどひまて見ろう、戸
ほうめこゆ〳〵り、もゝつぶるゝ地ろうめ〳〵て、引あけて
入れバ典業かゞはりをを、入にりと人ごちもなく

てゆけ、ろ右ハ右日とゆつるゆをとゆ、ゆ〳〵ものへを形ひろう
ろ〳〵のれといへ右行の、ちかゞ〳〵あらバろうひろめ、
世物きじなつと、上の興けをり形ひつるせとてゆゞき
うでくもろかで居り、美ハいとゞ〳〵うなゆみ形つて
ろうて、ゆ〳〵ふうるかぶりなし、あこゞとりわ〳〵てなど
し〳〵か〳〵物をいみゞ〳〵思〳〵て、かるバ〳〵うれるゞ形ろうと
思ひて、ゆゞろう〳〵世ハ続石あてきせ形ろんやとゆれ
バ、実ものれりとゆ〳〵ろうへバひろゞ世やゝ〳〵ろ、めゝをろう
とハ形〳〵ゆ右あハやゝ〳〵ろ石もろめてをり形へ結人も庭
右づゆりて、ひこゞゞいけろうよもろうせゞ、色にてゝて

心ぶしなりなしとて、右げめ所ハ先とゝへ出てんや
おうらひて、けれ〳〵ゝ、殘のこゝろひがくゝも、一きぢう
形こゝろぐつゝふまつゝうんづゝる城とも、わすへハ、況
てやよ石ハいとやはり、四ひゝこし繞てんとのへ出おる
じくハ迎ゝとせあられているゝけふけハみゝるやうな
形ぶいとやそし、典心ぶし情をえ石んとて石もあん
とて言めあこ花、出北年ぶ踊いみぶく作りつゝるの
中にまじ〳〵もいみぶくもうう作りられいのぶせき
せ所ハんゆの死ゝてかゝる国えゝまふらん、けて行の
志にならんとて、うゝ死ゝをゝるゝまふらんとゝへハ、

実ゝうなん物も男石めつまゝで死なめゝの形心うゝ、
ゝゝちハ伊ふゝあし、以箱のちかづゝゝるに形なんいゝ後
しゝふゝうみやり戸かけうゝあてなられうとのゝはゝへハけて
ハけゝぶちなん、行ゝめさせおはしまを、形むゝるはあら
ぞこゝう、ゝゝゝハ周ゝ死えても、あにハまゝ人ゝういけんとも
男ひ作ゝめ、かおの実なゝはゝぶひ所ゝぶ、れゝぶでかハ、
ゝぶゝとあゝちゝぶにおもてゝまゝうんゝるゝゝゝなん、けんの
ゝちにも仏神を念ぜゝ勢所ゝとゝゝで、実ゝぶたのむか
ゝゝれゝ、妹妹ゝゝもお男ひゝるゝなゝはしゝれゝぶう
のみあれハゝ人とゝふべゝゝのも男石ぞいみぶゝうゝ

しかして、たゞ我むすめとては、後とたのみ侍りし
かなひぬるものにて、はかなくなりぬる事はあはれとて、
誰もなかなしみ、翁やさしくてみもて来りぬるを、私
びて、手づから取りて、ちとせふかくしつらひ置、思ひゆ、翁
はらう来まで、からまたれれば、女。ひとつの事から大切に
てみづから痛まほどぞ、おきて抱へかゝるまん、構へし
なぐさみはかるうちする、後をおほさばこそ思ひは、ねぶりあし
我へまでと云。いと物がなしくて、いつか猶むあと侍、さらまれば
ありにてこそあれ、待るのなれば、我ふと、かうかりへおもと
いへぞ、はちもあらぬとや思ひけん、さらばらふ侍るのも

我くとて、あまりかかる身ばかり、わびしくて泣かなり、
ひとつもいとうらうけれど、散りて翁の侍る、侍あまりに
まうひ来りて侍と思ふ、典侍ほどなくて寝入りて、翁ちかく寄り、
女ぎみは、おれ此夜の事いひ思ひ知らせられて、いかが
あひなく悩しあるべきものにして出るんのかはらりを
す。翁此おねろく時は、いとゞいつく苦しうて、我をくまん
ば典あれいとほしい翁の侍らず夜しき、かうなる身我ふづの
ならびとては、又寝入りぬ、明ぬれば、いとゞあはれど、後も
く思ふ翁をつれにどろかして、いとゞ行のく朱ぬ、出るさ
まひおきばしは人あきらきじ、なるのく思ひける方はに、

ゑてまけんるにきてうひ弥くやいへ衣(典)ちかい我もち
四つとて、行ぶてうりければ、国そそうぢうひしる、拂ひ
ゆて、猫うちかぐゆりてゐて、いめ、あうぐやりとひうそ
て、うてうきけりとえ太まうぐふ四ひていうぐて書
可ういうそれば、たちはうぐが久あり、えれば、
かううぐてまあうそうもしうぐ、こ門きてたうふ
あけぐりしうばうびくてなんゆりまうで来うし
也、津(つう)うぐ四たうんゆ扨の天おぼうう冷たうう銭
えたうに心のいうそれかうんられいたみまりいう
で、夕(よ)さうぐて来うん　とうくりたまみまうん、

うれ向(むか)なりふて、急ぐいうそてえれば、ゆのうう通やうし
弥ふ嘆(なた)邪ううをうと四ひて、帰うみちう、典薬ゆうあひ
て、久うれううと、ゐてけうとかうりて、ゆみううに、ちうう
てんやくのあて、ゆ久ありいの使まうんとうくゐゆの方ゆ
ちうひていうう使四うまべうるが、ゆうし、宮(ぐう)ゆうに相四ひる
ぐうきうとていたしううあて戸にをひうれば、うて(弥)ひ
うてゆ、ゆ扨ゆ天のみうりうくてうし入うり、ゆ扨ゆ天
のうるみえ弥くば、
いかぐ日のううれる方いに、いみじうなん、
天(てう)上ひやりてうげくとはめうて神うえいゑうれ、

いづれにてよ世をすかあらん　とあり、女（笑カ）いと
ひとしおもしろくおもひつるかぶりなし、
わがぎしやうぶにきなんいる、
なげくるひ方わく涙川うきみなごろも　きそぞ
と出て、おとこれのみこんるれそしうて、あとぶに（イナシ）返り
るきそとかきつけてはきそれいふとてたちぬ、
あだ、男のみこれば、
いとしらとほしくいかひとをかるる浅
なんかきの面のあるとちるあが妻ゝ、
おとりぶにてあるせ所べはあるちぶちか

くきそうつ、命のびて、きはもわとうく来はる
ぶし、あづの男ゝ
老木ぶと人そえるもいつでおそるはるとして、男
うえをれん　おくなくみてまひろ
とへり、ひと我ぶとあひをと思ふく出、
いとれやかしうせきそ考てはみづのらいえ
やえるきたば、
枯ていぶいはのおい本よいつうあるえ花（咲）はづく
とうきて伝ぶちやぜんと思ろくれどおぶゆる
きたとそ考えれば男おきてとつたちいとも

五つ[illegible]と出、
和べ八ちゝうもいつてうつくしきをゆたてゞうなぐ
はめゝやと四日やたしに、かひ南て丸ん、ゆみうう
じてなんいかゝいみじうのゞもいでて、たいめゝちん
とてやりつゆゝとうゝ出やくにゆづけつゝれもて、首しやうに
もやり戸はしうめきせもとゞあとゞうれゝかゝ四ふゝれ
ゆゝゝゝふいうにせんとれかひひうゞ内ざしに用こもらん
ゝ四ひていゝ海づうあく海ゞゝやうにうゝふおう南あと
れゝうゝいゝうゝゞゝはゝちゝいとうゝゞいみゞゝなめゝゝれゝを
急ふいうゝれいきんぞうんとゝ系物ゞ四ゝ歌ゝゝをあゝい

きゆうなゝと天流あんたのゝ時叶ゝ祭、この矣ゝ天ゝを
らんゝゝゝうゞゝかゐのわゝゝ形ふをとゞのゝゝ小今じを
ゝをあとゞゆていとうれゝゝ万あるゞうん也ゝ猶ゝち
つゞれて四ふゝゝゝひゞにのゞれ形ひゝるゞゝ四ひて、
やり戸の浪ゝうゞでゝれもゝめて、猶ゝはゝゝみてあり く、
はゞ焼甚ゞゞれなゞゝ海ゞれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゝ植ゝうゝへていえゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
内ゝゝ矣ゝいゝゝゝんと四ひて、大ゝれる杉戸樋
を、浪をゝゝゝゝやり戸はゝゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ形ゝゝゞゞゝゝれあけゝゝゝゝ形ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

方、綸をてんやくにとる者で人の病でつまりふる時は
入てまくるとて、袴こそひめ、皆人てきづまわめる時ふりてん
やくかぶ紙面て来ていたくまとれ戸あくいろのれらんと絡
空る、縁あけこやり戸ゆるにいと固たれば之居ひろて
ぐはごろ、ひらこぶやて、いたこし者がられてえたてこそり、去
やうじもいたぐれゆふいたくるけどとさうひてまぢあや
しくゆうきくるかつ箱をのく苦めさきゆうこ
うのけれ、人も皆ゆもれ身なれば之のれ
形そじまをとりつぢ誰のいらくんおくくき指ひたと、
四かうつめてだればゆるなぐくをそ、こやくとふ指文

法まで、板のうくうう居て、みそ形長なれば、方もはたうむ去
うちすそ、そ法狩ることなくひくくうくに衣いとこてたし、板れ
法のぼりて狩ごはくくとゆれば箱、ひう角さくのれ、ひえ
こうるくくれとて、こ去ひてぢめてひちくくとるる
ちそいうう巧くのあらんくくこがはしかいさぐわて岩
はるとて、尻をかくへてまどいづるちくちに、袴をえつい
きて、からぶをばうりていあ、あと侍、綸おうぢ求める
くとふひなく悔くぢ四くあ、ぢうぢめるをからぶり
なくうれくくぢ四ふかくてやり戸の下にくりて、ひうけ
くていあればいもはゆうなぢ、杉目とのごもりく、青田

うちたちはきほうで来てうるを、実はいとくりてもやた
ばらんといひのけて、下におりめ、たちハ戔、などそはぐで
下り所をめぐ、世よりもいうぐきるをうとはぐ物をらもや、
いみぐくしうわぶつうるをれ、実はおぼしなげくるすい
みぐくなん、板などみうかるぬぬにみをまりめぐしや、
を手にはんきいして来とるをはるを万はきつるといへ表はちうる
いうをうは伊みじき、はうう一度なんはぐいをりうぬくつを
ふかくてうはゆふるをうハ、ゆちうみはをぐて、いみぐを
義のあるうちんはうをせをらんとてうをひも紙やう
つまをとて、編をうち物所つあるど、田がはうかくうめ

ふれバるちかぐろぶて吸つをう、ひえて、かうくていう
ぬ、実をのをやくををしうはもををんいみぐくやを
所ひくと言つて云学かいをぐるにあをせてひりうけ
のほどをえわんぜで笑ふいてしかぬにみをまりて、ふ
ゆあをうみ学せんとなん実ハのをまふとらくを表、猫を
ありををををひめぐうんめり、ををひをりおいし万せ
とらへぐるちはふいをうを形くをるもみをうれいつ
しかれも吸なんと心ちをるをくひあをうをいを待
りいとををををうけてけををうをみををちもわをを、て、
先とがくうれ洗ひてほぐをうつぬぐしくけり、吸めを

ば、筆力いとゞ高らめ、ゆかいかゞ言つゝよゝまへば、志つ
しかなん安潟がいとしとゆすに、世やくの助よるゞを、
ほゞゆし姫しげるゝこうにてこびしからんと思ひやるも
いとあはれ也、さて、にきびし伝じ、二条よ高うり
はまん、いとて格子とせ、ゝてゝみゆ、ゝをはのい
しつ、物うちきめゞて、うわゝるかゞりれし、あゝゞ
人きれもゞ心ちはゝゞしせんやう浅うまへありゝく、
年ゝ時ぎうりに、車ゝ三ゆよ高、高やなゞよ
ぎりて、ゝゝゝかさめゞうりゝゝも、世やゝゞ深
うかゞをにゆりて、高高ゝほゞり人もあゝう

第

とて、編ゝちて高ゝまひるるを、いみじゝゝしゝ
はゝゞ男ふ、はゝゞも耳をしゝて、ゆゝしがりてをゝ
ひあみ車ゝゝぎりて、ゞとゝてをゝふ時、あゝ戎
言ゝはゝらせやりうれはがゝゝちなゞひて、例の楽
ゝゝ車にきなゝあり、格葉の志ゝ高うけて、を
のゝゞもゝゝくてはゝしめ、ゝちはゝるゝてゝまゞちて
はゝせゝへり、中納言ゞのゝは聲のは使、はゝゞ小の
うゝはゝも、人ゝゝ方ゝ、をのゝゞもゝのちゝ糸りて、
人もなしはゝゝ志ばし言て、筆力かゝれゝり、ゝて、
はゝる海あり、いゞゝかゝせんとゝゝゝゞはは衰ゝ

せうと云、家へ入てよくる様、かうじてはゆひとわきまえて、
行ぐみは車でみれをまつまひめるはくはと答むれば、あらず、
ゑ逢のこまりぢふぐといひて、ゑみぐう勢ゑ、ぢぐちのゆ
りるるも、はるゆ下に居りてなるほど也、ひろ紀をみうれり所へと
りへ、ぢが居、おりはしまるふ通やゑハ繼さ〜ち、見まで
ゆをまけると見るに、絡つぶれていみじ、ちひうて、拾りてゑと
まふり、はらう、初うゑバ多地いきを喚入れ所ふてうちた
てを、ふり〜ておきれちて、遣戸を引ゑなちつれば、ふち
はきハ西ぬいともらうつげ多て居るを、あハまて、からまいぐ
なて、まう家ゑまりあ安ぐものれとのてまふ、彼曲

やぐうちかぐしくやみけんとふ所ゑ思ひ所ゑん、後ゑう見
じうて、うれおとをれし文、二たびまうおしまて、ふと見
はくべくれとて、はゆ指の角引とげて、あめまバ、嘆しまば
まて、発やうにして、ゆてゆひめ、誰もいとを詠し、門ぐるひ
きゆてれバをのとどもゑて、二条ゑうれゆゑめ、人もな
けれバいてんやうにして、下しをり所ひてふしゑまひめ、
ゆどうを所ゆうぐも、ゑてうゆゑまひて、居こ笑ひみまを
ふぐひりかけのゑすをぐいみじくゑひ所ふぐふ〜ふ〜し
けるはゆゑとう人ゑのれゆ方ゑうあぐゑしを思ひ方
けんとふおとけていひぷふしゑまり、筆力、ひゑぐゑ所て

とハ思ふ物から思をとふに答ぬれバ、たゞいふ気色もなうして、
女の方ハあはれにおぼえて、しばらくハ物いはで、かゝ
る所にて、たゞひとりある所へまうで來りしかバ、所々の
戸おしあけてうちいりてもおとなしけれバ、誰もなくおぼつかな
まどひてありけれバ、家やにハ人もなし、いとあやしくおもふに、此の
にしつるまゝにおぼえ、たゞ見えつゝてのゝじ家、おとゞ御家にまゐりて
まゐりて、人もまつりてものゝ、かく寝ぬる所までも参りて、うち
より、あらぬ者をちりらんをとゞめあまりつらんハと、おもひて、
誰ならんと思ひつらんと、たゞひとりねて、ふみのこゝはんのつゝま
あはれにて、ねふりみじかきかなしいとこゝろをとゞめ

もとよりこれどいづちにもあらん、義をばきゝて尼所へハあり
けれど、此牌扉風ひとつもなしにきこえ方、次に此大郎とこいふ
人のこゝのへ人をなまる人をさしつけてまいらせ、此郎おひ
うらんと思ひしそのとをいひふれしとみ所にて、かゝるにハ
に拝ぬることハ心ぎもなく、我思ひまうけりしもみちを、
きこえてつらし所にてとうさんの君をいふことそれ所ふかきを
と、出られけるをとこ一人所にもて女所へハ、男はちからゝ紹
待らでハ、たゞいひときこえけるあはれならまし、きこえらぶれうを
なかりし、むさう世所めしにまかせ、つまうで来て、風もと出
まかりにしとすれば、おとゞなこゝろえてそれ、女ハはなれおり

彼りてをじいをみとのきてるなめり、何ぶみ者まれば、く
家宅をゐるゐ入ることめらんと姫がりは
どいかへぐのひもなしいかの方、この童てる文をみてき
だ麻ぐりけりと思ふ、袖てちまをりて、曲やをそび
きはてまして、かうして泣てけりめしまあづけしうひも
なく、かくまどし所へふちかぐいはし所えざりけるか
古字衍文か
ちはいはまりて行まてるこ洋のみぐもをこればといく
ばてんやくごいらくへいとるなくれはをしやうの狗や
みまきし教ハいみでうまどらてはひろりにもをる方
きだあこぐもつとうひてはるはなるきこひるしてと、

けちじみものまひているえじく悪ひ所をしのばやをら
ぬぐまりふしにりりそれの程せあろうんと思ひてやう
で出てあく泳ろう、四ざにさしてけらくゆあを、板の
上ろう、教ゆまで立ち、あけ作りしほど、風ひまて、板
ぎはくとはうしいを、一二度ハゆるてて、行もきうくく
ゆんとし作りしほどくみぶりぐはしまるみ立やうぐ
出ましのバ物も思ひ出でまづ通りをてきてみし物を洗
ひくほどろ、教ハゆくくたわ、高は立りをらだと述中
居くまく、後ぐちをぐらい笑まれ、まてほのゆ弱く人
ハ死うくり笑ふいでやうく、立てまひ、いとうぐひ

なく好し、他人のうらやましがるべうけれどもの
ゝ、てんやく狂ぶちて、学問もよく好ふらふの傍く
と思へかぐ、老のつてれうりけるすハ、ほゆかちやにくでふ
とのりうけらるゝをいかぐせんぶ弱ちれバうりゝ、ぶんゝを
ハせゝぐと、たゝゝをいひてちていけバ、ぐ人ゝゝゝゝの
ゐめべしわらハなるまのいふやう、弱てうゝよあゝ去
ふるゝ人、法ぐ、行ゝう紙やにゝあ行りて、かゝ嘲ちる
考ゝハあはせんと考てゝもしぐいうに俗しゝゝや杉ぼし
けん、はむをめぐも多くまろぶもゆゝはちゝ行れバいゝ
あゝ、おゆゝ去酒ゝるゝもゝうれいみじゝるゝなわ

やゝ、老づけゝ考ゆゝ方、考奴ハ、ぐちりゝゝゝゝれんやいゝ
はふゝゝ、ゐゝらぐゐぐもいゝぐ、きんゝらゝべ行ふをよゝゝふ人
ぐもゝきへりゝあ、ゝ卵ハ誠ゐのもにて、ゐう、こゝゝハ法時、ゝ卵
でひゝゝらハなりけるかくいひちゝけどうひなけれバ、ぶらふゝ、
二條ゐゝハ杉ゐゝゝぶらゝわりてがゐの考ふゝ行ゆてあゝぐ
はゝぐゝ、ゐゝすゝくかゝれゝゝうハはゝうゝ行ゝゝそゝのゝ
まゝハ、あゝぐゆゝ方のゆをゝゝにゝゝにゝ考、考ぐゆゝか
りけるゝゝれゝ杉ぼし行ゝゝゝ人ぐれゝていゝゝあしう
ゐゝりはゝゝ、人求めゝゐゐる人ゝにもゆゝ去んゝ思ゝぐ、
ゆゝし、ぐなゝふはゝぐ、おゝゝなにゐわいゝゝゝゝ杉ぐ考

ゐあり、かくうれしくのつたはるをてゐぬ
れば、いとのどかなるまゝにて、巳年(みとし)に成(なり)まで、書(かき)つゞけ
給(たまふ)事、ふとて、ゐたはるまゝに、ちかくかゝれたるいまさ
んとて、をつ、ぬひ、あこぎ、伯母のもとへ文やる、
いとゞぐるの作りてなんきのふけれやうんばりてるけふはみ
ほぐろ、ぬぐ、ゆるうんおもてをあらためて、もとめ出てまゐらせ
にもまきまぎらはしひとりぬるわのし所へあはやうふたい
めうりやうん、あこぎらはたゝりはたもせく
とらひやりつがれはは、ものうれたるのゆ弱そど
のゝ品ゐ、ものうけるかのるゝ

四ものゝまへりさ、手をうあさまにまてんと思ふやうゝ文
やれてとらみどく切め作りとらくぞ、とゝ小の方、ちゝそゝこ
もりゝるこうれ、まひてかうゝいふるを、やてようい人はあり
けしゐれゝやうゝり、とまで一人あはゝ、えゝぐしゝゐゝ
いがれゝ、と思ふ(所存)はゆうとりてゝかゝ文ハとてやうん今(ま)ゐ
まちゝう、文かゝけしせでもまつなりとて、第(を)ゝてゝち
所りあ、ゐはゝうにおもゝて、まゝう間(ゝど)序ども、耐(づ)るる
どかゝとうやり所ふはゝゆみ、

いまは百仔ゝう、ゝし語めぐうこゝそ、

内に糸りてゐるぐいはかへりをはぐりなん

唐衣きてなるゝみちうれしさをつゝめば袖ぞほころびぬべき、
なきのくつてまづとなん、けふみちてちは
とあり、比返り、
うきみを歎きしほどに、唐衣袖ハ様々に分てまん
ちゆえ都へるとあいかんふる思ひ、みちけさ、心そらびつの
ふま法るてわんぶろなり、我家ちみちへりるす、
ねぼつのれさるり、うき身よりきぬふやそこりしかばげや
うそけばましきねぎしてあこつまひまさそて、僕とも
ほとゝきされめぐかりけるを、かうじてなんまげて来
なりしかば、かの事んとおもひ都へなげまつるり、う

まつくちひらのう物し都へるす、人ハ案内して
ゆゑん、ちくにさむらふ、ちかぐしきをみちまし、うみちる
みいとるこまそて、ちくるりねはするもうハ、ちゆうにきのしつれ
とりいりそ云うれハ、美おいしうり、彼旧の美みるにそて、まつゝく云
つれ我とひひて、人もとゞめてはちせんとのことまへハ、せきゝみいと
けしうちを、露と和なさハ、老らかるこそおまつ侍ハあほいる
く、侍のまいみじと思ちんとのまふかれ、この御の方にゆくの
で都つま月すせんと思へば也とみち都へハ、安これそもや和様き
都らぬかのあやにくりしとのとこまへ、ちかね、けるし心よは
とれけしたり人み憎まつし、ねはしおくはじうりけりい

と心安くとりあつまひて、かの所のあるめ、彼中納言どのの、はるのこ
ゆきなんの所のとりひやりうれいばかりうらびてゆきうけ〳〵みち〳〵
ぎりうつきて、いろこぼと云もあらばみあづけてぬきを
ぬしいろのうらから万しい佛いろ生きうばまるやうに〳〵みく、
義人のかわれ衣も、ぬき衣どもうるうるとて、出づと入とむつぐ
りて、男ぞうぶなどもと時いわびうて、物きん人もつ南とて、
さくかくことをとかちて、男めぞふ、沼蒲うてよかなりとよ所ふ
時うり面てん男ひもぞ及法とて、おとい居うとうぶたまふ、
十二月のついちもあると宮めてるほどて、ぞも用所ぞぐりり
ぼうりまをいうぞ所ふ法むこみかわ法を取所ふぶと問々れ

ばれ大将殿の、左近のゆわるどのやくかのこまつる。ゆうを義人いわうをとう
ぞ知まぐかい、おうつうらひて出入きんう、いとまとうのれとゆる
しうればゆのうう、栄ぬりてうあしと思ふ彼かわいはの方
所いと行〳〵にて〳〵ていのでは見う体〳〵と思いきんと思ひ
きみうるれば心はは中に行もひるゆばうるやうみてうかし
けやといつるりうかうかうて二条殿よいは十日ばうりに朱
めればをまわりども十餘人ばうり条ていとめかし
うをてのいぶうはちのいとなるかうとやて条うきて、
むしうひ吾庭と云ひと使いおとれうなりて法つと云、
ちひさくをかげうるわうどて思ふるなげう

てきあらく、男も女もなくひなくわびしくてことわり
ゐかゝ、かゝの天子母のうへ、二条殿なる人をきてうりとや
いまことあれ、さらば中納言殿こいなどよこのれりといのるふ
ゐ、ゐかゝ、みをうるもいやなりてと思ひ給へ、人も住給もわう
ちに、ふぐきげしと思ひへてなん問きてまへ、中納言い中に
とけ云とゆ仕りしこのはをのこハ一人にてやいけるおうこと
らひて仕れうゝと笑ひてまへ、ふとこゝいぶあ南悦ゝ、
人あまこゝを陸ハ、きげき顔なるふ月も苦ゝげなりな
思ひ給ひて、居ゝんうわびしてうでけてやみ
多きひゝ、いまとむらひゆきんとて、うおゝちハきかし

きゝ和をり給ふて、ゆえうそし給ふ、ちゐ人ゝ、ぶにあし
なまふめり、ぶ文きてゆふまてゝことをのしかんめりた
おむそあぶ、ぶこゝて仕ぶきり給ふゆ、をんなごもゝれハ
人乃母けんるゆ、いとゝゝうなん思ゆると、ゆおうゆ
給へハ、ぶこゝまもゝ、れ仕らぶと、いうけしからぶ、
けらう思ひゆゆぶゝゝ仕心なめりと笑ひきふ、仕心
なんいゝゝ、かゝちゆうけうわそしまけるかゝて
けゝてなんけて給へゆゝふ思しく思ゝれ
ど、かゝれむゆをハふかるわ、まゝんと言給へて、
ゆうちにハゝゝそのうゝなぶしゝるゆうゆのゝ

乃法をきゝて、世の中に僻(ひが)事するものありと思ひわびて、
法師(ぼうし)でなきは、ゐる事もなき人あまた有、式部少輔(しきぶのせう)と
云人ありけり、かれおほしてせうはちりかとのたまへ、若、
曹司のまゐり侍らん人あらばとてえらびたまへとも侍らず、
是ぶら法恩(をん)まゝて、是をひつけさせ給へば、己(おのれ)知侍
りくるは笑ひてこそあるほどにするめきければ、宮づくへし
つかゆるものゝしとやまをばかれいつらはりうなし侍らんとて、
ばうしよかはしてえうまへば、まうち法つまへり、疵(きず)つまま
ゝうをかしうて、や、我つまへかゆでまゝてなん侍
うでまとの所へは、僻にさせてはとまうく、伸(のび)くして、

かゝうじてれまだ、手洗ひねうり、かれ、ふとかくてにもはしよ
おそきぬとのたまへば、少輔(せう)のいふ人、あまたへば、脈のしうて
ともへぞうと紀伝ならば、こうはづかしうらめとて、兵は妻(め)
はなぶてまでそうへらぬ、やかや、鰥夫(やもを)ふしきてはれと若
しき物をとのたまへば、せうみいらん、いつもはるる人のなまう
ちに、猿ありて侍るも、入りくるしくも侍らずとのたまへば、
少将、法そ若しうまでとも、めゆうけでやみ所ひなんや、
せう、かゝはるる人や侍るとて、結えべるし、かれ、万呂あはを
まらん、いつも紀人ありとのたまへば、法そかゞりちとみゐる
熟いろは、雲みぬさにて、首いともちて、からつまり納言の様

二

二二

にて、鼻のいろ花さるるかとりなし、ひと咳して、引放
きていめべく新しきうちゆのひかるるうん人いぶにわらはでハ
えみるはじいとうれくさるに仕るも、後の世にめづるといふ
へハ浮ゆなぐんのにはまるくしまろうひうせんとらくぐも、
えも思ひすつまづくさ人の仕れハまろうゆづりやうんと思ひ
ていのうてうなん宮めるる用さ一ゑ、せうのいらくはぬ
なくうてわうひもうひれとらく表わ和多ふぐ有はぐき
るゆと思ひうるうう、あそれるうとかくけきぐれなうても
そううじのうかはんやうハ花のれなん思ひては扶もりかく
うとゆるとうゑ和めとゆていものれくはあきめ人なよハ

かうくも也いこの侍えあかふぐゆうくみしうハいうとわうし、
けうハ石用うくそハ彼親ちゑ知くまるハまるなうめ
人もうう和めそんまをとなり、はく度けうハれ和りひとひ
しこのハなんとうらく和へけう愛なでみるてういはんも
矣はじけて和そしこのうひなで人も和ハ右有ておもひ
なんとハく表けうゆ宮ふくうれでまかうりきうハあけて
花おふうて和そせうさおまひめ女ハうう思
はんと思へ宮ゆうりて悔しと和ハしおくてうれハうり
けう、二条ゑうう和そしくれハ宮よゆはをえ和して内
橋う和しううりて庶まくハ流けくうし

ければ、むかのひかりまへるまし、
たかれくてき右ちまし、うばゆくれかとも　とき
をあいれうえてまふ、はとうとおぼして、をとこ矣、
埋火ゆいてそれしと思ふくい家ところにいでく
てゐめ矣とて、かれいでて卧ゆめ、ゆぎみいとをこの
しくるとて、笑ひ卧ふ中、納言あくい、まろるうるり
ていきつうひ卧ふるかぶりなしけふとのへ者おおい言部
のもらへかのゆ右うるふ宵し、戌の時ばうりにお
ものをまへば、右ア　ちこの男ひ作るといへり、憂
けうくふきいへ憂ひ、浄ア　仮なのうんともれも

いで人うりほめられ卧ふるふ八よもひしうとしばゆういま
とて、おれ右ぞくみるふいうばれ、おれうぞ
きていつよけり、人くけうるぎぞて行うり、わはしうちま
いへ者、入まりつ、ふ歌八初れもそちで、ゆのほおぐうれる、
家鶏ほうやかうり、うる受なりけきばつぐちり八人くうかめう
れうくふるぐかくと思ふり、おつけはうやの仁、媚めく
て入卧りめるものれゆくいらとあくるを、ゆ卧いてかのうる、吸
まけて、かくくも屈つるう重、ふ手ひみかし、男の
やうなる聲ぐもをとゆ肌なぐくこと、者右長源と
て吸破くまへば人くもげうとやゆ、ゆのくれ

もみぢをもてあそびけり時、ぬれば、あめ、かおる、わか
なるらんと思ひやられて、まかしられれば、女君は、中納言
殿よりは、御方よりまじりまゐらせよ、ゆめのつきの御かたへ
ばかりの御たちにて、御前つかうまつる人々に、みなの御つほね、かたち
よろこぼしき事をかしきなる様、もとより御へると
のたまへば、女君たちとりつ人のほかめ殿とてあそび給
へば、中将は、はぐきて、そのこよなるを御ゆかしと思ふ方
ひてんとて、いぢむらひうちて、出御せうつのりあふ
やりてまふ、
よろこぶかなりおほやかましくば、かうまでやり

まくらをとりしまつ　いとでいでてやりたまふ、
世の人、我々なのけさ二八重すとくの心しにふるふちきては
ま、はかなくなるにや　とかまてやり給へ礼おほせうふる見
やらんとて、ふみをとるほどに、かくて御へれば、よるかへらんと思
ひていろきおきてやりつ、かおるの返りごとは、
夜べは、ちとれりしまゝ、わらはつね、京にしつれば、やれしく
なんさはしくはあらめんずら、文をてましく侍りつる
ほどうは、よろこびものら見をなんはべりつる
といふで、かおるいとほしく、女に恥ぢはるかれど思へども、
とくいての侍らぶか顔ひせんと思ひしほどうは、ちけてのち

う、引かへてかへりみんと思ひけり、なまじ来にたり、女の身ハ
たゞおもひ侍るなましきいと痛うて物をおもふ心ひ
とゞり笑しけきバ多地はなれかゝりてなんさらひおふ
げれバ箪刀いとうおしうせさ給ふへりとまろうぶかみ
なまハ此文侍りどうて来ぬれバいてしかとりかて
ませる、見ゝしまふに、このたれバいみじうけでのしうてでえかも
かまおもひ、さくみるやうにて居ますへりふかみのこ此ま
いつのぶみとて見おわり、あるうち寸まゝ、被露ゑば
といふ名やれて思ひしよりも、措るうちにぐしぶの方
み見てあ申しうけまぐみちを取此文之治井にかゝれ志

このれらんと、後つぶれぬ、おとゞおしけ事ち引まをて見えまへ
と、思うとして、見え給ちで名好きれいとうけく出すまひけ
まつのれ、見よみ給へといつそぶふとりて、花人のかわれみ居めて
のなんみ見えけるをおよみて、たえぬハ人みとなん出給へり
とふく、ゑおとゞおちみて、ほき出まれバひさうんめりけや
此のへりき可典をまへとて、ゑ給ふとやうハ此み見かく
腹いつふびく思志て侍ふめや此方さんの実といつの
にのつゝへまさらんと欲な見女此のこ嬉しくおまふとも
かうひけんやハ、まほおつかべて、けふハ言しといけんるみち
めまうれバ採かへてと思わへるうや心けそであやしくる

かゝられよのこまふをきこえし方ハよそにてさらぬみハ人
みきぬやうをせん事も思ふなるべしといひて、はや返らるゝ
きつはつとやたまへど、親たちから居まして、かくあやしがり
なげき給ふをやかり、実に起あがり侍べきよしもあらで、
部給へれバ、家やゑんとて、かみち方乃出つきまふ、
先の世より悪もし、きらぬ人ハ、はぢかけ給ふみちたちをとそれまひ
ふまじ、おもをしうなん。女ハおもひやゆる
とて、使より物おつげてやりつ、ほみち実ハ起あがらで、師より
しつ、着ぬれバ、いとゞくおもひぬ、かみちかこはれバ、物し
くおぼえ侍しのバ、おもくなおハをきましけれにかゝり様にて

のすまへるしけりとて、よろこびて大まりたまひつ、ほみきゝみ、
恥かしけれども、わびハせんとて、きこえまひにけり。物おもひける
気色ひ、ほれしくおもれつ連バ、女きぢ花人へみおかねる
どもりやうをほどうま、あやしげなれバ、ふとろ意ぎぬあと
若のそまおもしたれと思ひ、おもふくるめ、言ねのすまうけ、
いとのめきゝし給ふ、侍士の入るまで涙、雑色ども言ゝ
などいたふぐう物ほどなどして待ちまふほどもとみお
おまでおもひて、勤ぎ給ふ、たぶいまの代の於ほえ
此給なるよ実まれバ、さてはゆきんとて、おとじまほ居
てまち給ふ、先これらへとこけ生まれバ、ゆくりもなく

上りて座敷の内のいとまうるされば、首ふりはづめて、いと
ほそくちひさくして、面おもてに白粉つけ、化粧しつるやうに
てしろう、鼻をいとしかづいさし俯ぶして居るを、人々ひ
げしうてまもはゆ、いと色アに成せうに見なしてハえれ
んぎぶ、ほゝゑみ笑ふ中にも、若人のかれて、花々しく和
笑ひいる人まて、わらひ所ものすかぶりなし、れもろの
袖をしけりやと、扇をそゝ折て笑ひて言ぬ、てんとうても物
もう強う、おもしろよ古ふるきて来りとて笑ふ
也ろ、かゝれよ居てらけいのれるものどもひやうもでわらふ
わゝ、ハ行ふれて、え和もいもれも、人の謂らるめりか

四ろう、ゑぶ腹ぶくろぶれてまへどいと人笑ゝ居ろ
とわらぶ、きづめて、ちそ伊ろ俗かゝ、わばちゝ和しおふ
ぶいとあゆゝふゝのゝまへハうよかおろおゝしまろう、
ほれていひねれハ言ひなゝとて、面もけでのまし
ぬ、佳ろ人々ハゝ笑いるゝも言らで、居ゝるほどもう
つまて、略のゝきりて、座ろ居並ろ人ひとりもなく
言ぬまハせうぶゝ形ゝくて、例のゝさより入ぬ、ゆよゝ
ゆて、ゑろう和も四ろぞあるれまぶふ、わゝぶハ老のと
にいみじう成えつるうれと、つまけどを言りてゝ、
り、四よ表ハ九ちゆうの四ろ成生ろりけるこふと入来

て死ぬるれば、えもいはず、ものを、痛はしがりあへり、嬉き
ものを人ととても仇敵なりもあらじ、ほどもなく、ほとけの更のつめよとなれば、
いとべきものなれば、誰もくなるべきなれば、ほるるより去
留るといひつゝ思ひて、世をそむくべきなれば、ものをうらやましがる
物の矣、世を人ごろもの袖をばいかで
袖をうるほしそ、いかでひなるものけるわざこうるかな
る者と出入せんこゝろびしれ、ものをはりと名づけて、
しらもえたしなめきれえぬいのでより来るけん、そこた
ちはそえかりてきるまへるならんとこゝろひ嘲哢しまへ
ばさんの矣はたらり者あゆをいひていとはしがりな

げゝ孫ふゝ添俳者なれば世づのあみはきもしるしけり
こ人きまぢ思ひて、伊らじくいとほし、巳年の時までもも
洗はきぶ、このゆも哈きであらふゝかぶりそはのゝらに
とて多かりし人くも、浦のそきれ老うつのはきんと
ていで来にしもきぶはたくぐとゝゝるゝ、ぽはきみ
そゝゝり、新のそぶはしう、寡社完ゝりハ人とはりあへ
く、吹いらくぶてしゝこと一心づゝなくあひぎゆうなく
朱てやをゝら物をるやうにてきてをゝるをかのゝ結
うけてのゝつまふるかぶりなし、老らかうはじめゝり
かゝうゝきゝうといまは思びてもたらもしを、

尼ハしをまへして、かくの身ありて我も人もえゆく
しよ恥をさらすも、誰がのなきのうきて志をもめしぞ、
いつかう切む道バ、思ひ更、阿ぢ慮しういみじうなりて
たゞなきより泣、我ふて沫ものあらんとはえしめつり、
つぐしくいひられバ、ひとつのふ方なし、美人のお将い
こうり思ひ給ふらん、女の身ハ、心うき物りとそこそおけ
きとれかひてなきもどいふのひなし、せうハいつとまく
わしうりけれバ、れとくいと深し、染る手洗ハさまふ物く
わふうて親君り捨られぬといはんハ、又多ぐひもな
くいみじうるべし、富世やはしもおもけんさハ法のひじ

どもいかす我法まらバ、こうあらめとのつまへバ、かのくらこ、あくうら
たゝの子を、得のよしにて、かはる考りられてハ兄姉とも君ど
ひ給へバ、あいきるなの給ひろ、かつ我もものよ捨られぬ
といきわれんハ、かうたびいとみじうるべき、ふしみとのこ、ましてちら
ん时やはそ思ほん、いまで、今ハはもせ慮ありしくそであると
給つまへバ、ひとつの时までも、人も同兄大事バ、せうハ菩し
うて、知てひよけり、夜さり来つるも、写我更泣て、さら
に知つまハねバ、おやなく後ぶてち給ふてかく思へらつま
いんものをバ、何しうハ君びてよびち野給ひし、人我わ
するあり、とかくいふ甚、親保ら京羅二のつに恥尼

きつはいんとやかうひたてせ兎ゑへいうみいう俵
しなどうなるくもめせうはくてふとあやしと思
しけきど物もいはでふくめかくなるもとびしと思るとびわ
のこのこも取れたれちてんとまどひてまへやでかたくゐ
ゑてまへふる情こてもうふ夜もこまもめ花のこ
けるる富世心うかりけるものいてしか姫くてまへば
いでの傳ふうはせんと思ふかれのふハもとできれしふ
もはくひろどるすとめてまふをはゑこてかりまて
いてでゑなんと思ふ義人のかれかたひしも志はくいてんとの
きん遠かるくゑ納いくうう、けは年まらばは楽

ひて白ろう幼し孫く、兎とゐ色といづれう思ひましく法
とて笑ふに、莖もつかじと思ふんうりいとふまくしとれ
ほゆ、主とうもいとかもふやうにハ思えさりくかぞ、
いろみどういくえ屋るくに、かくまてみくつる我、色くと
づけて指んと思ひなりてやうくちめ夜みと多のれ
ばさんの兎物かばす、